教えの庭から

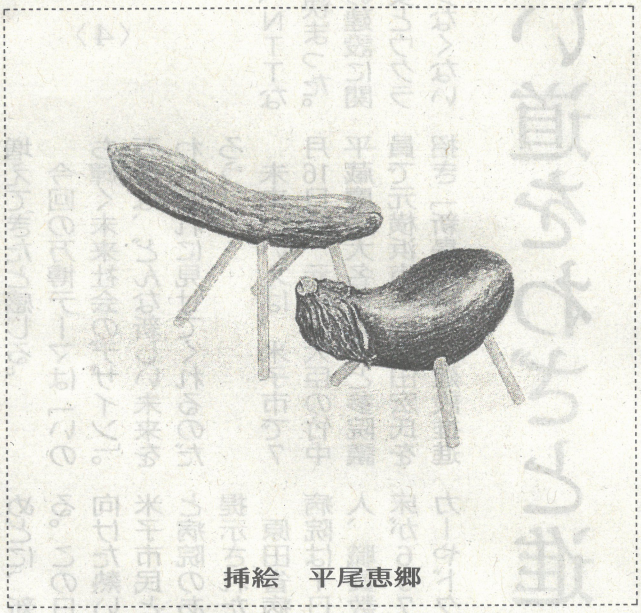
お盆がやってきます

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道

今年もまた、お盆（盂蘭盆会）がやってきます。お盆は、精霊（亡くなった方の霊魂）をお祭りする仏教行事です。出雲地方では、8月盆（旧盆、13日から15日）をする家庭が多いようです。子供の頃、お盆の正式な呼び名・盂蘭盆の音だけを聞いて、「裏盆」の意味だと考えて、それなら、「表盆」もあるのかなと思っていました。また、魚釣りなど、生き物を殺すような遊びをしてはいけないと、注意をされたものでした。

盂蘭盆とは古いインドの言葉「ウランバナ」を音写したものです。盂蘭は倒懸と訳し、盆は救うと訳します。倒懸はさかさに吊るし下げること、つまり頭を下にして足を上に吊るすので、苦しみの極みです。盂蘭盆は、かかる重い苦しみを救うことを意味します。

お盆の由来は、「盂蘭盆経」にあります。そこには、お釈迦様の弟子・目連尊者は、神通第一で、父母の大恩に報いんと、神通力で亡き父母のありかをもとめられた。すると母はいま餓鬼道に堕ち、ひもじさの苦を受け肉落ち、見るかげもなくやせさらばえておられた。



挿絵　平尾恵郷

目連はこの様を見て、悲歎の涙にくれ、直ちに鉢に飯を盛り母にささげられた。母は喜びこれを食べようとされると、飯は火と化し、食べられない。目連はこれを見て、悲しみにたえず、お釈迦様に、この哀れな母を救い給えと請われました。

お釈迦様は、「目連よ、いたましい御身の母、地上にありし日、善いことばかりでなく、悪いこともたくさんされた。その報いで餓鬼道に堕ちたのだ。御身一人の力では、これを救う事が出来ない。7月15日という日は、修行僧が自らのこれまでの修行のありようを反省し、懺悔する日である。そこで、多くの僧たちに供養をして、僧たちの徳の力をいただければ、母のみならず、父も親族も先祖も皆救われるであろう」と言われました。その通り供養したところ、お母さんは救われたということです。

お釈迦様はさらに「先祖思い、供養をするように」と教えられました。

お盆の時期には、ご先祖の霊が自宅へ帰って来られると考えられていますが、家路を迷わないように提灯と灯篭を用意します。また、ご先祖様の行き帰りの乗り物をとして、キュウリとナスを馬と牛に見立てて、乗り物とします。馬は足が速いので、こちらへ早くきていただけるように、牛はゆっくりと歩むので、ごゆっくりお帰りくださいという気持ちがあります。

作り方は、キュウリ・ナスのへたの部分を頭とみなし、それぞれの4本の脚は、割り箸を適当な長さに切って、それぞれに差し込んで脚とします。それらを精霊棚に置くとき、その頭の向きを配慮します。自宅に帰られる13日は、頭を位牌のある方向に向けます。中日14日は、滞在中ですので横にします。墓に帰られる15日は、帰りやすいように位牌を背にして置きます。

「お盆の期間、先祖様は、お墓を留守にしておられますので、お墓にお参りする必要があるのですか」と檀家さんに尋ねられました。

「華厳経」に、「仏様は、この全宇宙に充満していて、広くすべての命あるものの前に現れている」と書いてありますので、あなたが先祖様を拝まれる場所にすぐに現れてくださいます。どうぞお墓にもお参りください。